

<p>研究テーマ</p>	<p>いきいきと活動する生徒の育成</p> <p>～教育活動のユニバーサルデザイン化を目指して～</p> <p style="text-align: right;">米子市立湊山中学校</p>
---------------------	--

1 テーマ設定の理由

(1) 「〇〇〇な生徒」で言い切れない多様化した生徒の姿

- ◆明るく人なつっこいが、社会性に乏しく、自分をうまく表現できない。
- ◆きっかけを与えれば頑張るが、自ら進んで役割を見つけようとししない。
 - ・「〇〇〇な生徒」では言い切れない多様化した生徒の姿が目につくようになる。



(2) 目の前でこぼれていく生徒に直面して

- ◆教職員によって課題や問題の受けとめ方は異なる。
- ◆対応についても多くの場合、その場を担当した教職員個々の判断に委ねられる。
 - ・「〇〇〇な生徒は、△△△な指導をすればいい」というステレオタイプの指導では、日々の生活指導や教科指導がうまくいかなくなってきた。
 - ・これまでの経験知を生かし、生徒への関わり方や指導の在り方について工夫改善をしてきたが、その対応は個々の取組の域を超えず、日々、目の前でこぼれていく生徒の姿に苦悩してきた。

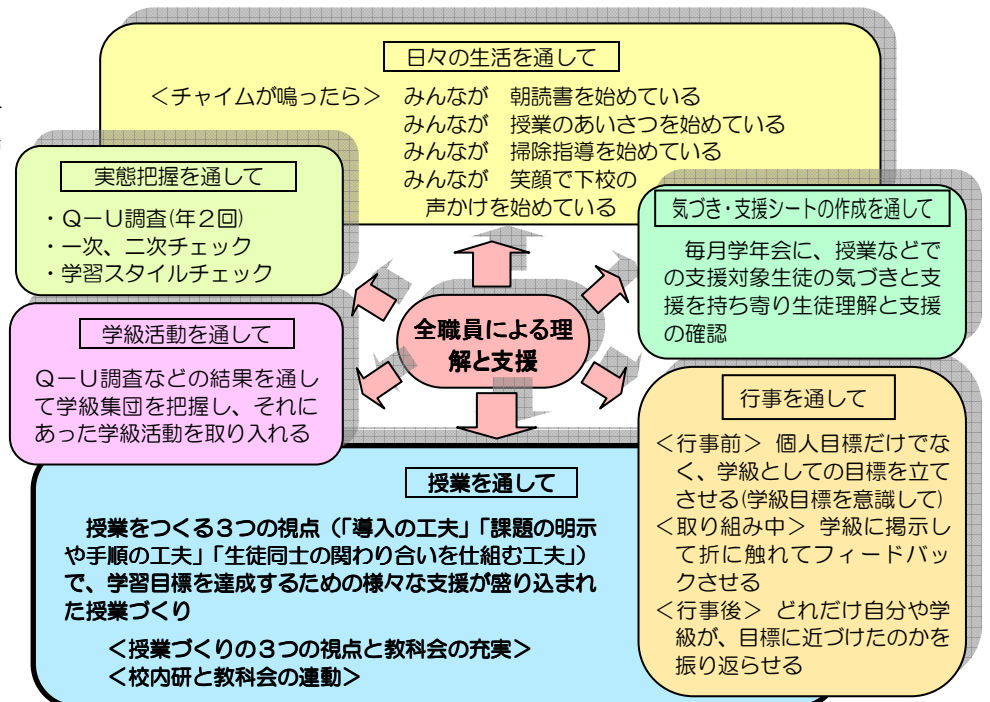
(3) もっと幅広く生徒の姿を見つめたいという思いから特別支援教育へ

- ◆その子にあった関わりをみんなで考えていこう。
- ◆荒れの見られる生徒に対し、特別支援教育のノウハウを広げて、個別に表れている現状と課題を整理して教育を進めていこう。

・課題を抱えている生徒が、今までよりもいきいきと活動できる場面を増やすことができるのではないかと。

(4) 全職員で大切にしてきた取組

- ◆支援の必要な生徒理解の共有化
- ◆生徒理解と教科のねらいを一体化させた授業づくり



2 取組の概要（ユニバーサルデザイン化を目指した授業づくり）

◆研究の方向性が全校で共通理解できた授業研究会（英語）とその後の教科会

- ・ 支援対象生徒の状況とそれに応じた授業づくりの模索
- ・ 教科の質を大切に授業をつくることへの気づき
- ・ 全体研から教科会に取組をつなぐ事後研の設定

校内研後に設定した
教科会の報告用紙より

教科（理科）		教科主任（ ）													
①視点に沿った教科の取り組み															
導入の工夫		<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">実験行程</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>計時</td> <td></td> </tr> <tr> <td>記録</td> <td></td> </tr> <tr> <td>操作①</td> <td></td> </tr> <tr> <td>操作②</td> <td></td> </tr> <tr> <td>操作③</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		実験行程		計時		記録		操作①		操作②		操作③	
実験行程															
計時															
記録															
操作①															
操作②															
操作③															
<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的にインパクトに残るもの ・ 課題解決学習の流れをつくるような導入（疑問の投げかけ⇒授業を通して解決） ・ 導入で求めるもの <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の思い込みを覆すようなもの ○ “なんで？” “どうして？” と思わせ ○ 思考の流れをつくるのが学習の楽しさにつながるもの 		<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">準備・片付け</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ピーカー（2）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>スタンド</td> <td></td> </tr> <tr> <td>三脚</td> <td></td> </tr> <tr> <td>マッチ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ガラス棒</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		準備・片付け		ピーカー（2）		スタンド		三脚		マッチ		ガラス棒	
準備・片付け															
ピーカー（2）															
スタンド															
三脚															
マッチ															
ガラス棒															
関わり合い															
<ul style="list-style-type: none"> ・ 実験・観察時の役割の明確化（全員に役割があり、全員が授業に参加する工夫） 															
課題の明示や手順の工夫															
<ul style="list-style-type: none"> ・ 実験・観察の手順を記入させたり、図を描かせる （全てを板書するのは大変なので、プリントに穴埋め形式にする） 															
②教科の特性として独自に取り組みたい研究内容															
<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の導入と1時間の導入 <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元の導入に力を入れて、単元全体への興味・関心を高める。 ・ 単元を学習し終えた時に、導入で感じた疑問が解決するような授業構成にできるとよい ○ 役割の明確化（準備・片付け&実験行程での役割分担） <ul style="list-style-type: none"> ・ 実験・観察での役割分担を全学年共通にする <p>* 役割を与えて全員参加 * できない生徒へは、できる生徒が教える、リードする（手をだすわけではない）</p>															

◆どの教科でも共通して取り組めた授業をつくる3つの視点について

授業デザイン書
の記入例より

(A) 導入の工夫

- ・ 板書したり、カードを貼ったりして、最初に学習の手順をはっきりと示しておく。
- ・ 導入の段階で、生徒が意欲的に学習活動に取り組むための仕掛けをする。

(B) 課題の明示や手順の工夫

- ・ 「……について説明できるようになる。」というように、生徒一人ひとりが何をすればよいか、そして何ができるようなことがゴールなのかを明確に分かる具体性を持った課題を明示する。
- ・ 「……について、グループの誰（ペアのどちら）が指名されても説明できるようにしなさい。」といった指示をして、指名後には仲間に向かって説明させるような課題提示の仕方をする。
- ・ 課題提示後も、全ての生徒が課題に取り組めるような補助発問や支援（声かけ）をする。

(C) 生徒同士の関わり合いを仕組む工夫

- ・ 場面に応じて、個人・ペア又はグループ・生活班・全体などの様々な形態を活用する。
- ・ 課題解決への手順は、活動の形態を変えながら活発になるように工夫する。
（例）個人で考える→グループで考える（役割の分担→討議→意見をまとめる）
→学級全体で考える（グループごとに発表する）

【校内研前に数学科で作成した、3つ視点に沿った授業参観の視点より】

	授業づくりのポイント	具体的な視点
工夫 導入の	<ul style="list-style-type: none"> ○ この時間のねらいに迫るための工夫 ○ 主な学習活動へのスムーズに入る為の工夫 ☆ 関心・意欲や注意の高まりを引き出す支援 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の流れを確認したすぐ後に、教師がパンタグラフで実演することで、生徒の興味を引き付けた。
手順 の工夫 と 提示	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらいが明確に分かる課題提示の工夫 ○ ねらいに到達するための発問の流れの工夫 ☆ 生徒の興味・関心にあった提示の仕方の工夫 ☆ 支援が必要な生徒に対する声掛けを含めた補助発問の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 模範図で実測して、本時の課題を視覚的に捉えさせた。 ○ インパクトのある課題提示をした。 ○ 模範図を最後まで黒板に残し、学習課題の確認に利用した。 ○ 生徒の意見を分かりやすくフローチャートにまとめた。 ※ 意見をつなげるための補助発問を組み込む。
工夫 生徒 同士の 関わり を 仕組 む	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒同士の関わり合いを、「どの場面」「どんなねらい」「どんな形」で仕組むのか ○ その中で思考力・判断力・表現力が高まるように仕組むのか ☆ 場面に応じて、支援が必要な生徒が学習活動に参加できるような関わり合いをどう仕組むのか 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 導入でペアで作業することで、その後の話し合いも活発になるように仕組んだ。 ○ 終末で、より高次な学習課題に取り組むことで、パンタグラフの価値がクラス全体で共有できるように仕組んだ。

◆習得した技能を生徒同士の関わり合いの中で活用させた授業実践

昨年度まで進めてきた研究実践をより確かなものにするために、ノートルダム清心女子大学・准教授 大滝一登先生をお招きして、校内授業研究会（1年生国語）を実施した。この研究会を通して、共通理解のもとで進めてきた取り組みを出し合うとともに、「言語活動」をどう授業に位置付けていけばよいのかについて確認し合うことができた。

【国語】相手の反応にあわせて、新しい発見を感じさせる説明をしよう。

○錯視を用いた「隠し絵」に隠されているものを、相手の反応に合わせて説明する。準備の段階ではペアで練習を積んで、隠されているものを相手にどう気付かせるのかを考え、ペアでその伝え方の練習を積んだ後、新しいペアをつくって発表し合う。

【全体研究会で立てた討議の柱】

- (1) 3つの視点に沿った授業の振り返り
 - ① 3つの視点で分散会ごとに報告する。
 - ② 支援のあり方について、3視点に沿って整理する。
- (2) 3つの視点に沿った教科の独自性についての意見交換
 - ① 自分の教科実践のヒントになったことや既実践していることを出し合う。
 - ② 教科のねらいを達成するための効果的な支援のあり方を考える。（様々な支援を要する生徒を意識して）
 - ③ 授業で、どんな学びの姿をイメージするのか。
（言語活動をどう取り入れるのか）
- (3) ユニバーサルデザイン化を目指した授業づくりについて
 - ① 教科の壁を取り払って取り組める授業とその中での支援のポイントについて考える。



【事後研でスーパーバイザー大滝一登先生からいただいた助言（抜粋）】

- ・ 教員の準備で「全員がそこそこ成功できる授業」は、一応達成できた授業だった。次は、「生徒の自主的な挑戦」のできる授業づくりを考えることが大切である。
- ・ 結果を求める目標では苦しい生徒もいるので、「〇〇しようとしている」とか「〇〇を目指して〇〇を行う」のように、その子に今日の達成感を持たせていける目標にする。
- ・ 評価規準をもっと具体的にすること。どういう状態になったらいいのかが、もっと具体的にわかるような授業を考えること（例：～を説明している）
- ・ 説明したい重要なこととは何か。隠し絵は伝えたいが、いろいろな見方があることを伝えなかったのではないか。隠し絵はおもしろかったが、「いろいろな見方」について本当に学べたのか。
- ・ 言語能力をつけることは、国語の目標であり、それを手段として他教科が授業に取り入れる。
（例：スピーチの仕方を勉強するのは国語であり、他教科では、言語活動の中に手段としてスピーチを利用する）

【事後研で出された意見と校内研後のアンケート（抜粋）】

- | |
|--|
| ①国語科が提示した授業から、自分の教科実践のヒントになったことや、すでに実践していることは？ |
| <ul style="list-style-type: none">・ 授業の進め方がきちんとパターン化されていると、生徒が安心して「いつもの学び方」で進められることを確認できた・ 生徒が「わかって面白かった」「そうなんだ」と感じる題材(教材)をいかに授業の中に盛り込んでいくのが大切だと再認識しました。知識注入型になりがちな自分の授業を反省した・ 自分が活動しないと授業が成り立たない活動を仕組むこと（言い換えると、自分の学びが他 |

に必要とされる生徒同士の関わり合いのある授業)

- ・ 1対全員だけでなく、1対1で話し合う場面を授業の中でつくっていくこと
- ・ 授業の中で、お互いに発表を聞き、それについての評価や感想を言い合う場面があったが、一方が言ってそれっきりになったり、プリントを書いて2～3人が発表して終わることもある。しかし、今回の授業を見て、一方通行で終わるのではなくお互いに返しができるといいと感じた

②自分の教科の授業で、生徒のどんな学びの姿をイメージするようになりましたか？
(そこに、どんな支援を考えるようになりましたか。)

- ・ 生徒が関わりあって、学びを高めあう姿→生徒が関わりあうことのできる教材の開発
- ・ 導入時：分かりやすい目標の提示（取り組みやすい具体的な言い方：5感を活用させて）
「どんな説明ができればいい」「どんな活動ができればいい」「どんな作品ができればいい」
- ・ 「特別支援教育の考え方を柱に（土台に）」ということですが、教科に対して苦手意識を持っていたり、理解に時間を要する生徒が安心して学習に向かっているように手立てをして、活動の中で仲間がうまく関わられるような部分を意図的に仕組めたい。毎時間の中で、1ヶ所でもできたらそれを継続していきたい
- ・ 友達の作品を見て、そこに込められた想いや、色・形から受けるイメージを読み取る。そして、自分の意見や評価などを言葉や文章で伝える。伝え合うことで異なる考えから学んだり、自分の考えや価値観を身につけていくことができればいいと感じた
- ・ 学びをまとめていく（表現していく）方法や力をつけるために、「言語活動」は自然に入ってくると思う

3 成果と課題

○言語能力をつけることと、言語活動を取り入れることとを整理できて、各教科での授業づくりの在り方が明確になった。

- ・ 事後研でスーパーバイザーの大滝一登先生には、「なぜ今言語活動なのか」「各教科の中でどう取り入れたらいいのか」などの助言をいただき、各教科で言語活動をどう取り入れたらいいのかも明確になった。また、「これまでも、よい授業には、必ずよい支援があり、よい言語活動が入っている。」というお話から、本時目標を達成させるために、これまでに、「どんな言語活動を取り組んできたのか。」「特別な支援を必要とする生徒にどんな支援をしてきたのか。」について整理することが大切であることにも気付かせていただいた。

○どの教科の時間も生徒にとって安心して学べる空間となった。

- ・ 教科の目標は違っても、学び方やアプローチの仕方は同じで、そのスタイルこそが授業におけるユニバーサルデザイン化である。この一年間は特に、授業づくりの3つの視点に特別支援教育の視点を盛り込むという考え方のもとで、教科の枠を超えて授業づくりを進めてきた。
- ・ その成果として、どの教科の時間も生徒にとって安心して学べる空間となったのではないかと。そのことは、「先生は分かる授業を工夫しているか」という生徒アンケート（昨年12月実施）の回答からもうかがわれる。（3年で74%、2年で74%、1年は83%で、昨年度より15%から20%増加した結果が得られた。）

▲多様化し続ける生徒の実態があるからこそ、支援体制のマニュアル化と教育活動のユニバーサルデザイン化を学校体制としてより確かなものにしていかなければならない。

▲教育活動のユニバーサルデザイン化と学力向上については、その成果を十分に検証できていないが、少なくとも評価の工夫と評価後の生徒への手立てについての研究は来年度への課題である。また、授業が分かると感じている生徒は、2・3年生で微増に留まっている。授業が分かることが、やる気につながり、学力向上にもつながっていくと考えたとき、各教科で本年度以上に言語活動を積極的に取り入れながら「生徒が分かると感じる授業」について研究を進めていく必要がある。